キルケゴールにおいては瞬間と反復の問題であること、そしてこの思想が時間と永遠の問題を含んでいることについて触れたいと思う。

実存があらゆる実存段階を貫いて最終的に到達する、キルケゴールの考えるキリスト教信仰とは、すなわちイエス・キリストと同時的となって生きることである。それは天に挙げられて永遠に現在するキリストの永遠的同時性に霊的に参与することであるとともに、それにふさわしく、信仰者の側の真摯なまねびの行為において、地上のイエスの苦難との実存的歴史的同時性でなければならない。信仰者は、瞬間の自己化によって常に絶対的逆説と共にありつつ、絶望と躓きを克服する日々の絶えざる戦いの中で、罪の赦しを自己化し、その作用として実践を自己に課せられた倫理として受け取り、神の前に謙って反復的行をなすことにおいて真に現在を生きるのでなければならない。

『メノン』の結論についての考察

齋藤直子

目次

第Ⅰ章　予備的考察（一）
第1節　「結論」をめぐる問題　―何が問題か―
第2節　「結論」までの道筋　―どのようにして「結論」は出されたか―
第Ⅱ章　予備的考察（二）
第1節　A.E.Taylorの見解
第2節　K.V.Wilkesの見解
第Ⅲ章　「結論」の方向性
第1節　「正しい思わく」の重要性
第2節　Wilkes説の批判
第3節　「結論」の意味するもの

徳が何であるかを主題とするプラトンの対話篇『メノン』において、全体として徳は知識であるということが述べられているのにもかかわらず、「結論」では徳は知識ではなく教えられないものであると締めくくられている。そのため、この「結論」は不可解であり、困惑させられるものであり、この点について様々な評価がなされてきている。本論では、この「結論」に関して有力であると思われる

見解を批判的に検討することによって、この「結論」の真意は何であるかを考察したい。

第Ⅰ章　予備的考察（一）

第Ⅰ章では、『メノン』の結論部がどのようなものであるかを確認する。また、結論部がなぜ問題とされるのかを確認するために、結論部が導出されるまでの対話篇の道筋を辿ることにする。

第Ⅱ章　予備的考察（二）

第Ⅱ章では、『メノン』の結論部に関して徳は知識であるという基本的な立場を保持しながら、しかしそこに相対立する要素を付け加える二つの有力であると思われる見解を見ることにする。一つは第1節で取り上げるA.E.Taylorのものである。彼は『メノン』において、徳は知識であるという見解は堅固に保持されているが、さらに後の対話篇（いわゆる中・後期対話篇）『パイドン』や『国家』に示されることになる、真の徳には及ばないが、民衆であっても習慣や訓練によって身につけることの可能である「正しい思わくに基づく徳」を認める方向性が示されていると見ているのである。もう一つは第2節で取り上げるX.V.Wilkesのものである。彼女は、「徳は知識である」（89ａ）に真の結論があると見、結論部ではこの真の結論が隠蔽されていると考える。しかも、その原因は、メノン自身にあると見ている。89ａの結論は正しい思わくにすぎないものであった。それゆえ、さらなる探求を続けることが必要であったが、メノンはその結論のみに満足し、さらに吟味することを怠ってしまっていた。そのためにメノンが自分が知識であると思い込んでいる正しい思わくと取り残されているよりも、不満足で間違った思わくと取り残されているほうが、メノンが徳を学ぶのにより好ましいものと考えて、ソクラテスは故意に真の結論を隠蔽したとWilkesは見ているのである。

第Ⅲ章　「結論」の方向性

第Ⅲ章では、第Ⅱ章で取り上げた二つの代表的見解をそれぞれ吟味、検討することで、結論部の真の意味を私なりに探求していきたい。その二つの見解を検討するうえで、二つの見解において正しい思わくの評価が相反する位置にあるため、第1節では正しい思わくが『メノン』でどのような位置を占めているのか確認する。正しい思わくには、実際の行為に関する点では知識と同様に有益なものであるとして高い評価がなされている場面と、知識とは区別され揺るぎやすいものであるために劣ったものであるとして消極的な評価がなされている場面の二つがある。

Wilkesの見解では正しい思わくの評価は重要なものとみなされていない。彼女の説では、徳は知識であることを強く打ち出し、想起すること、また想起することを試みることの意義が強調され、さらに「結論」を隠蔽することでメノンに対する教育的配慮がなされ

ているとみなすことができる点ですぐれた見解である。しかしながら、正しい思わくが知識と比べてマイナスの評価がなされている場面も見られるが、全体として正しい思わくの評価は高いものであり、その重要性を無視することは私としては受け入れがたいことである。

正しい思わくに注目する必要があると考えられる。というのも、正しい思わくという言葉が用いられたのは、初期対話篇において『メノン』が最初である。しかも『メノン』においてこの正しい思わくという言葉が用いられる場面は、知識を獲得するための新たな可能性を含む想起説の導入場面である。ゆえに、正しい思わくがここで初めて用いられていることにも新たな可能性が含まれているとみなすことができるのではないだろうか。ゆえに、Taylorの言う『パイドン』や『国家』で言及されるような真の徳（知識に基づく徳）には及ばないが民衆でも身につけることの可能な「正しい思わくに基づく徳」が示唆されているのではないかと見ることができる。また、立派であると賞される政治家たちが自分の息子たちや他人を立派な人物にすることができなかったことも、彼らの持つ徳が正しい思わくに基づく徳にすぎなかった為に、他人にその能力を教えることができなかったが、実際の行為に関する点では知識に基づく徳に劣らず有益なものであったと見ることができる。

それゆえ『メノン』の結論は、徳は知識であるとする基本的立場を認めた上で、正しい思わくに基づく徳を容認する方向性を示唆するものとみることができる。

エコ・フェミニズムについて

平澤晴花

目　次

第一章　エコロジーとフェミニズム
第一節　エレン・スワローのエコロジー
第二節　フェミニズムの戦略
第三節　エコフェミニズムの成立
第二章　女性原理をめぐって
第三章　批判とその論点
第一節　ソーシャリスト・フェミニズムからの批判
第二節　ディープ・エコロジーへの批判
第四章　その実践にむけて
第一節　青木の「宇宙的雌雄性」
第二節　「エロス的文明」／「感性の知」
第三節　女性状無意識
第四節　「生命の力」
結　語

1、対象的「自然」の客体的科学としての生物学、その一分野としての「生態学（Oekologie）」はエルンスト・ヘッケルが造語をし、彼に起源を有するものである。ヘッケルは「すべての人の家」つまり、「環境」の科学を発展させる必要があると考えた。ヘッケルが